

北京日本学研究中心

通

讯

《第十九号》

责任编辑：山下纪久枝 雫燕 邮政编码：100081 Tel: 8422277--584 1992.4.15

离任致词

佐藤 保

在我来北京日本学研究中心任职以前，该中心前任主任户川芳郎教授深有感触地对我说，中心的主任教授一职其忙的程度与日本中小学的“教头”（相当教务主任）不相上下。在我即将离任之际，深感此话千真万确。

本中心建立以来已进入第7年，日常事务已在教学与管理两个方面基本形成了固定的形式。尽管如此，目前仍然每天都要出现种种问题，而不得不忙于处理这些问题的正是“教头”。本来建立北京日本学研究中心的目的，在于培养中国的日本学研究以及日语教育的优秀人才，中心的一切活动都是为了实现这一崇高目的的。因此，出现的问题，在实现崇高目的的过程中只不过是次要问题。然而，却不能把这些问题看成是次要的，这就是“教头”之所以成其为“教头”的原因。

想来，问题出现的主要原因在于中心的特殊性。中心运营的理想，是将日本学研究、教育与中国的教育行政相结合，在兼顾二者的同时，进行中心的独立规划和建立管理体制。但是，“说起来容易，做起来难”，归根到底，只有互相信赖和不断的努力才是向理想迈进的良策。

我之所以能够完成一年的“教头”任务，是由于日中双方有关人员的大力支持，为此向各位表示衷心感谢。

（李庆祥译）

◇ 简 讯 ◇

- (1) 3月26日下午6点，“中心”在竹园宾馆举行了欢迎日方新任教师及欢送即将回国的日方主任教授助理山田真一先生的迎送会。“中心”陈海良副主任主持了晚会，王福祥院长致了迎送词。国家教委、学院的有关领导及“中心”有关人员参加了迎送会。
- (2) “中心”教师进修班的招生工作已经开始。
报名时间：3月15日—4月5日 考试时间：4月26日
- (3) 4月3日，由中方客座教授等主讲的专题讲座进行了第一讲。
题目：日语助动词论考 讲演人：刘耀武教授
- (4) 为推动科研与教学工作，培养优秀的研究人才，继社会研究室之后，“中心”准备于4月中旬成立语言研究室。研究室成员由“中心”语言学方面的中日教师及学生组成。

○主任：李 德

○副主任：中方·徐一平(兼任)、日方·古田东朔

第 4 届日本学中日学术研讨会召开

为纪念中日邦交正常化 20 周年，本中心将于 5 月 20 日（星期三）～23 日（星期六）举办第 4 届日本学中日学术研讨会。本次研讨会在全国范围进行了广泛的宣传，共有 137 名报名参加分科会，经过研讨会审查委员会的审查，确定了 48 名代表与会发言。5 月 20 日上午进行纪念讲演·「纪念中日邦交正常化 20 周年」（孙平化、鹿取泰卫）「回顾与展望」（王福祥）、20 日下午及 22 日下午由中日双方的著名学者·研究者进行特别讲演（中根千枝、王家骅、大冈信、鹿野政直、周一良、鹤见和子）、23 日以中方的学者·研究者为中心进行研讨会（基调报告：下崇道、刘耀武、李芒、万峰）等。欢迎各位前来旁听。

地点：20 日上午下午、22 日下午、23 日上午下午——

北京外国语学院东院·国际会议厅

21 日上午下午、22 日上午——

北京日本学研究中心（北京外国语学院西院）

	上 午	下 午
5月20日	开幕式（9:00～9:40） 纪念讲演（9:45～11:45）	特别讲演 I（13:30～17:30）
5月21日	分科会 I（9:00～11:40）	分科会 II（14:00～16:40）
5月22日	分科会 III（9:00～11:40）	特别讲演 II（13:30～17:30）
5月23日	研讨会基调报告（9:00～11:40） 「近二十年中国的日本学研究」	研讨会讨论（14:00～15:30） 闭幕式（15:30～）

『日本学研究』第 2 号征稿即将截止

『日本学研究』第 2 号投稿截止日期是 1992 年 5 月 1 日（以当日邮戳为准）。欢迎各位投稿。详细内容请参照「通讯」第 15 号。

公 开 讲 座

- ◎第 1 次 3 月 19 日（星期四）现代日本社会和「超·近代」状况 有末 贤先生
- ◎第 2 次 3 月 26 日（星期四）由珍珠连接的中国、日本和中东
向后 纪代美先生
- ◎第 3 次 4 月 2 日（星期四）「日本事情」和其必要性——在中国的日语教育
原土 洋先生
- ◎第 4 次 4 月 9 日（星期四）镜之目——古代中国和日本 犬饲公之先生
- ◎第 5 次 4 月 16 日（星期四）读少女漫画『Hot Road』 森 雅雄先生

通 知

“中心”第 3 次、第 4 次、第 5 次硕士论文答辩合格者的学位已于 3 月底全部审批通过。凡答辩合格者从 4 月 10 日起可到北京外国语学院科研研究生处领取硕士学位证书。特此通知。

離任のごあいさつ

佐藤 保

北京日本学研究センターの主任教授は日本の小中学校の教頭と同じと心得よとは、前主任教授の戸川芳郎教授から赴任前のわたしが受けた訓戒です。離任目前の今にして、この言葉の至当至言なることを痛感しています。

設立以来7年目に入っている本センターの日常業務は、教育と管理の両面において一定の形がほぼできつつあります。しかし、今なお日々さまざまな問題が生起し、その対応に追われるのが「教頭」の現実であります。そもそも北京日本学研究センター設置の目的は中国における日本学研究及び日本語教育の優秀な人材の育成にあります。センターのすべての活動はこの崇高な目的を遂行する過程に存在する二次的な問題に過ぎませんが、それを二次的と看過し得ないのが、「教頭」の「教頭」たるゆえんであります。

思うに、問題生起の主要な原因は本センターの特異性にあります。日本学の教育・研究と中国的教育行政の複合体であるセンター経営の理想は、両者の条件を満たしつつ且つセンター独自のカリキュラムと運営システムの確立であります。しかし、「言フハ易ク行ウハ難シ」、結局のところ、ただ相互の信頼と努力の集積だけが理想に近づく最良策といえましょう。

1年間なんとか「教頭」の任務をつとめることができましたのも、本センターの日中両国関係者皆様の大きなご支援があったればこそ、皆様に心から感謝を申し上げます。

ニ ュ ー ス

☆3月26日午後6時から、センター中国側主催で、竹園賓館において、日本側新任教授の歓迎会兼山田眞一先生の歓送会が開かれた。陳海良副主任の司会により、王福祥院長が歓送迎の辞を述べた。国家教育委員会及び北京外国語学院の関係者も参加した。

☆センター第3期・第4期、及び第5期の大学院修士論文の口述試問合格者の学位が、3月20日、及び3月27日に学位委員会において認定された。

☆センター第8期（92級）研修コース（教師進修班）の学生募集がすでに始まっている。出願期間は3月15日～4月5日まで、試験は4月26日（日）に行われる。

☆4月3日（金）より、センター中国側客員教授等による専門講座が開かれた。

♡第1回 「日本語助動詞論考」 劉 耀武教授

☆優秀な人材を育て、研究・教育を推進することを目的として、センターでは、4月中旬に日本語学研究室を設置する。成員はセンター中日の語学関係の教員及び学生とする。

○主任：李徳 ○副主任：中国側・徐一平（兼任）、日本側・古田東朔

第4回日本学中日シンポジウム開催

中日国交正常化20周年を記念して、5月20日(水)～23日(土)、本センターにおいて第4回日本学中日シンポジウムが開催される。今回は、広く全国規模で分科会発表者を募集した結果、137名もの応募があり、シンポジウム審査委員会の審査により48名の分科会発表者が決定された。5月20日午前には記念講演・「中日国交正常化20周年を記念して」(孫平化、鹿取泰衛)「回顧と展望」(王福祥)、20日午後及び22日午後には中日双方の著名な学者・研究者による特別講演(中根千枝、王家驊、大岡信、鹿野政直、周一良、鶴見和子)、23日には中国側の学者・研究者を中心としたシンポジウム(基調報告: 卞崇道、劉耀武、李芒、万峰)等が行われる。より多くの皆様のご参加・ご来聴をお待ちしている。

場所: 20日午前午後、22日午後、23日午前午後→北京外国語学院東院・国際会議庁
21日午前午後、22日午前 →北京日本学研究中心(北京外国語学院西院)

	午 前	午 後
20	開幕式(9:00～9:40) 記念講演(9:45～11:15)	特別講演Ⅰ(13:30～17:30)
21	分科会Ⅰ(9:00～11:40)	分科会Ⅱ(14:00～16:40)
22	分科会Ⅲ(9:00～11:40)	特別講演Ⅱ(13:30～17:30)
23	シンポジウム基調報告(9:00～11:40) 「最近20年の中国における日本学研究」	シンポジウム討論(14:00～15:30) 閉幕式(15:30～)

「日本学研究」第2号・投稿締切迫る!

「日本学研究」第2号の投稿締切期日は、1992年5月1日(当日消印有効)となっている。多くの方々の投稿をお待ちしている。詳細は「通訳」第15号参照のこと。

公開講座

- ♡第1回 3月19日 現代日本社会と「ポスト・モダン」状況 有末 賢先生
- ♡第2回 3月26日 真珠が結ぶ中国、日本そして中東 向後紀代美先生
- ♡第3回 4月2日 「日本事情」とその必要
—— 中国での日本語教育における —— 原土 洋先生
- ♡第4回 4月9日 鏡の目 —— 古代日本と中国 犬飼公之先生
- ♡第5回 4月16日 少女漫画『ホットロード』を読む 森 雅雄先生